

青年海外協力隊に司書として参加して

総合人間学部図書館閲覧掛 佐野 広明

1. はじめに

「井戸掘りに行かれるのですか？」青年海外協力隊(以下「協力隊」)への参加が決定したとき、周りの方からよくそう聞かれました。確かに協力隊に対する一般的なイメージはそういうものかもしれません。しかし、実際には様々な活動形態・内容があります。協力隊が1965年に発足して以来、これまでに2万人以上の隊員が派遣されてきました。つまり、2万人の隊員がいたら、2万通りもの活動内容があるのです。私は、1997年7月からの2年間、協力隊の司書隊員としてハンガリーで活動してきました。以下では、一隊員として私が体験したことを紹介したいと思います。

2. 応募から合格まで

協力隊は、春秋の年2回募集されます。私が応募したのは、平成8年度の秋募集でした。実はこれ以前にも協力隊を受験したことがありますが、現職参加が認められずに辞退したことがあるのです。

現職参加とは、すでに企業や官公庁などに在籍している人が所属先に身分を残したまま協力隊に参加することです。一般職の国家公務員の場合、派遣法と呼ばれる「国際機関等に派遣される一般職の公務員の処遇等に関する法律」(昭和45年法律第117号)が適用されます。私の場合、関係者の方々のご尽力により、幸運にも現職で参加することができました。

平成8年度秋募集での司書の要請は、ハンガリーのほかニカラグアとフィジーからありました。私は現職参加を希望していましたので、大学図書館との関わりがあるハンガリーからの要請を希望しました。選考には一次と二次があり、前者は筆記試験、後者は面接と健康診断です。

久しぶりに受ける筆記試験や面接を何とか乗り切り、最終合格発表の日、ついに「派遣隊次：平成9年第1次隊、派遣予定国：ハンガリー」と書かれた合格通知を受け取ることができました。同時に、あと1ヶ月後に迫った派遣前訓練に向けて忙しい日々を過ごすことになったのです。

3. 派遣前訓練

1997年4月からの約80日間、東京の広尾にある協力隊の訓練所で派遣前訓練を受けました。この派遣前訓練が終了するまでは、正式な隊員ではなく「隊員候補生」なのです。

訓練内容は、語学が中心になります。ハンガリーに派遣される総勢9名の候補生は2クラスに分かれてハンガリー語(マジャール語ともいいます)を勉強しました。ハンガリーでは、「名前の日」といってそれぞれの名前を祝う日が決まっていますが、我々はそれぞれの誕生日をもとにハンガリー名をつけました。ちなみに私の名は「アルフレッド」。今でも協力隊仲間が集まると、ティナとかフローラなどと呼ばれる人があるので、周りから見たら非常にあやしい集団かもしれません。

訓練では語学のほかに、国際協力についての講義や障害者施設でのボランティアなどがありました。中には本当に役立つのかと疑問に思うようなものもありましたが、同年代(実際には幅がありますが)でしかも同じ目的を持つ人たちとの合宿生活は楽しいものでした。

訓練が終わり晴れて「隊員」となるわけですが、いよいよ派遣というとき不思議と不安は少なかったように思います。むしろ、新しい生活に対するワクワクとした期待感のほうが大きかったのを憶えています。

4. ハンガリーについて

ウィーンからの飛行機でハンガリーの首都ブダペストに到着したとき、「色の暗い国だな」というのがハンガリーに対する第一印象でした。しかし、その印象もすぐに「渋い」というように良いほうに修正されました。ブダペストの中心街では、日本人が思い描くような古き良きヨーロッパなるものが色濃く残されていると思います。一方、団地などの集合住宅が多い地域を見ると、社会主義時代を思わせます。



ブダペスト

一般に協力隊は、発展途上国と呼ばれる国々に派遣されます。しかしハンガリーは、決して発展途上国ではありません。ですから、派遣される職種も日本語教師やスポーツ関係など、技術協力というよりは文化交流的なものがほとんどです。

ハンガリー人に関してですが、少なくとも私の周りの人たちは陽気で親切でした。そのため一般的にそういうものかと思っていました。しかし、油断していると道を歩いていてアジア人ということだからかわれたりして、不意打ちをくらうこともありました。

実は、ハンガリーに派遣されることが決まるまでこの国がどこにあるか正確な場所も知りませんでした。1996年にアトランタオリンピックが開催されましたが、サッカーの予選リーグで日本と同じグループになった国くらいの意識しかありませんでした。そして、実際住んでみればかなりその国についてわかるはずだと思っていました。ところが、私の場合、2年間滞在してもハンガリーについてうまく語ることはでき

ません。帰国後9ヶ月近く経った今、ますますそう感じるようになってきました。それはどの国についても同じことだと思います。ですから、ハンガリーに興味を持たれた方は、もし機会がありましたら実際にハンガリーを訪れてください。そしてそれぞれの感性でこの国の雰囲気を感じとってみてください。

5. 司書としての活動

私の活動場所は、デブレツェンというハンガリー第2の都市にあるコシュート・ラヨシュ大学でした。ここからの要請は、寄贈された約6,000冊の日本語図書を整理し、日本語図書室の体制を整えてほしい、というものでした。協力隊の司書といっても様々な活動内容がありますが、今回のように日本語図書室の整備・運営といった日本語教育や日本研究に特化した要請が最近出されつつあります。配属先は最も関係のありそうな大学図書館ではなく、人文学部の一般応用言語学科でした。というのも、この学科では1995年から協力隊の日本語教師による日本語コースが開講されており、寄贈された図書もこの学科が管理することになっていたからです。しかし、まだ学生たちは日本語図書を活用するまでの能力を身に付けていませんので、図書室としての業務よりは寄贈された図書の目録作成や装備が活動の中心となりました。



コシュート・ラヨシュ大学

大学中央図書館との最初の話し合いで、日本語図書室の蔵書についても目録は中央図書館のシステムに入力することになりました。中央図書館では、アメリカの図書館システムを導入しています。ですので、目録のフォーマットはUSMARC(現在は、CAN/MARCと統合されて

MARC 21になっている)のものを採用しています。また、分類表はUDC(国際十進分類法)、件名標目はLCSH(米国議会図書館件名標目表)、そして目録規則はハンガリー独自の国家規格を採用しています。UDCはハンガリーでは一般的に採用されているらしく、デブレツェンの公共図書館でも使われていました。



大学中央図書館 玄関

日本語図書室は、中央図書館がある大学のメインキャンパスから離れた建物の中にあり、学内LANは整備されていませんでした(現在は別キャンパスに移転し、LANも整備されています)。ですので、中央図書館のシステムをオンラインで使用することはできません。どうしたものかと思案したのですが、結局は日本語図書室ではスタンドアロンのパソコンを使って目録データを作成し、それをフロッピーディスクで移行するということになりました。しかし実際に目録データを作成しようとすると、様々な問題を解決しなければなりませんでした。USMARCフォーマットにおいて日本語をどう扱うのか、ローマナイズの方法や分ち書きはどうするのか、また、USMARCフォーマットにはどのように変換するのか、などです。中央図書館の司書の方から貸していただいた資料をもとに、これらの方針を決めていきました。

目録データ作成の技術的方法としては、悩んだ末にSGMLという枠組を利用することになりました。エディタでマーク付けの目録データを作成した後、SGMLパーサによってデータの検証を行ないます。そして、パーサの出力したESIS形式ファイルを、スクリプト言語により

USMARCフォーマットへと変換するという方法です。参照するDTD(文書型定義)はUSMARC用のものを独自に作成しました。また、SGMLに関して調査する過程でインターネットを通じて多くの情報が得られましたので、このときほどインターネットの重要性を強く認識したことはありませんでした。

2年間の活動の結果、図書室の蔵書約6,000冊のうち3,000冊ほどのデータ入力が終わったに過ぎませんでしたので、目録作成およびその他の整備を後任の司書隊員に引き継ぐことにしました。今後この図書室が発展し、コシュート・ラヨシュ大学における日本語学習や日本研究に欠かせない存在になればと思っています。

6. おわりに

外国において日本語図書室の整備に関わる、ということは非常に貴重な体験でした。特に、最初から活動期間が2年間と決められていたこと、そして、業務のかなりの部分を自ら方向付けできたという2つの点でそう感じます。今回の派遣は既存の海外研修派遣と異なり、先進諸国の図書館を視察し調査するというものではありませんでした。しかし、協力するために派遣されたとはいっても、実際には学ぶことのほうが多かったように思います。これは別に司書隊員だけではなく、ほかの多くの帰国隊員がそう感じていることでしょう。

この文章を読んで、協力隊やハンガリーという国に興味を持たれた方がいらっしゃいましたら幸いです。そして更に、協力隊に参加してみようかと考える方が多く出てくることを期待しています。

最後になりましたが、協力隊参加への過程で、また、ハンガリー滞在中においても励まし応援してくださった多くの方々に「ケセナム セーベン!」(ハンガリー語で「どうもありがとうございます」)と感謝いたします。

(さの ひろあき)